薩摩青雲丸

第１号
鹿児島水産高等学校
薩摩青雲丸
指導教官

最後の航海実習へ船出

令和３年度第三次乗船実習スタート

乗船式

本船は、来春４月の新船竣工により、今回の航海実習を最後に二十年に渡る実習船としての歴史に、幕を下ろすことになります。

十月二十六日、第三次航海実習の乗船式が行われました。海洋科二年海洋技術コース十一名、専攻科一年海洋技術科六名、専攻科一年機関技術科六名、計二十三名の実習生を代表して、石原太洋君があいさつを行い「最後の航海実習にふさわしい態度で実習に臨みたい」と学校長と士官の前で抱負を述べてくれました。

本科十一名＝十月二十六日枕崎港岸壁に接岸中の薩摩青雲丸前にて

対面式

乗船翌日十月二十七日、実習生と乗組員の対面式が行われました。実習生は緊張の面持ちで自己紹介と実習に臨む意気込みを発表していました。

対面式＝十月二十七日枕崎港岸壁にて

各種操練

十一月三日、操練を実施しました。海上ではより迅速な避難行動や非常時対応能力が求められます。乗組員の指導の下、実習生は真剣な眼差しで各種救命設備の説明を受けて、操練に臨みました。

退船操練＝十一月三日錦江湾洋上にて

指導教官の目

乗船実習が開始されてから約十日余りが経過しました。実習は順調に進んでいます。枕崎港および錦江湾での健康観察期間を終え、いよいよ本格的な航海実習が開始されました。この１週間を振り返ると、本科生については、寮生が多いこともあってか、船内環境への順応が早いと感じています。専攻科生については、日々奮闘しながら知識や技術を貪欲に吸収しようとしている姿が印象的です。今後も安全指導に重点を置きながら実習を継続していきたいと思います。

本科生に航海日誌の記載方法を教える専攻科生

航海士を志して

専攻科生としての自覚

専攻科生は本校卒業後、即戦力として活躍することが求められるため、より実践的な船舶運航技術を習得する必要があります。その責務の大きさから、本科生とは比較にならないほどの厳しい訓練や技術指導を受けています。今航海が三航海目となる彼らですが、目に見えて成長がうかがえます。同時に、本科生への技術指導や生活指導も大事な役割の一つです。日々の技術習得に奮闘しながら、本科生に対して実習生としての模範を示しつつ、時に兄のように温かく接してくれています。

機関士の使命

船の心臓部主機を守る

機関士はまさに船の生命線である主機の制御・保守・点検・整備の全てに精通していなければ務まりません。機関技術科の専攻科生は機関士としての技術や心構えを徹底的に叩き込まれます。機関士立会いの下、合格するまで実技試験や評価が繰り返し実施されます。

主機の整備点検実習＝十一月二日